

寺田寅彦の天国地獄観

四 宮 義 正

ときどき国立国会図書館の資料を複写利用しているが、その方法は大きく変化してきた。インターネット環境が整う以前は近くの県立図書館に行き部厚い雑誌目録を調べて所蔵があれば3枚複写の申請書を郵送する方式が長く続いていた。今は利用者登録をしておけばネット画面で検索して簡単に当該文書の複写申請が可能になった。さらに2014年から図書館向けデジタル化資料送信サービス（図書館送信）が始まって、県立図書館へ出向けば文書を画面で確認して複写サービスを受けることができるようになった。官報や論文なら自宅でもかなり閲覧が可能だし検索機能を使えば寺田寅彦についての文書を探し出すのも容易である。

このシステムを利用して全集未収載の作品に気が付いたので紹介する。大正13年1月1日、表現社から発行された雑誌『表現』は新年にあたり「天国地獄観」という特輯とくしゅうを組んでいるが、そこに寅彦の寄稿が出ている。少し長いが全文を記す。

科学研究者の立場から見た天国地獄

寺 田 寅 彦

科学は五感を基礎としている一つの学問である。それだから毎日毎日そのみの研究に没頭している吾々に宗教上で云うところの、あの百花満開の庭園で天女みょうかくが妙楽そうを奏している極楽浄土や血の池、針の山、青鬼赤鬼がすばらしい景気で大きな鉄棒を手に持ちながら入口を堅めている地獄などを、いったい如何どうして承認することが出来ようか？吾々科学研究者に向って「あなた方は宗教上で云うところの地獄極楽を承認なされますか？」と質問する人があるとすれば、それは承認する訳には行きません、と答えるより外しかたがない。けれども明けても暮れても科学の研究題材ばかりを取り扱っている吾々には一種の信仰と云うことが或は人一倍あるのかもしれない。それは斯う云う結果ための為である。即ち科学の研究題材ばかり取り扱っていると不思議なことにでくわすことが、それこそざらにあるのである。尤も吾々の立場から云う不思議なことは世間の人々が云うところの不思議なことは、その趣を全く異にしている。それだから同じ言葉の不思議なことでも吾々の云う不思議なことは（一）如何いかに研究しても判明しない不思議なこと。しかしながら、この不思議なことは今日でこそ不思議なことだ、と云っているがいずれ後日には判明することであって寧ろ問題視されない種類の不思議なことである。（二）不思議なことにも研究すれば研究するほど自然の力の偉大なことにおどろかされることである。で前言した如く、科学者にも人一倍の信仰と云うことがあるのかもしれない、と言ったのは（二）の自然の力の偉大さに感謝すると云う意味からの信仰なのであろう。

信仰と云うことは事実である。それで吾々から観ては兎戯みじきに等しいところの宗教上の地獄極楽

の存在の有無も所謂、宗教を信じてそれで満足することの出来る人々には地獄極楽の存在は確然と承認し得られよう。が、屢々申し述べた如く吾々科学研究者には如何しても、それを肯定することが出来ないのである。

吾々が一つの「或るもの」を研究するには物理的時間と精神的時間との二つの方面から研究してかかることが肝要である。それをただ単に物理的時間のみをもって研究してみれば、そこには必ず限りがあるものである。しかしながら、それに精神的時間も加入して研究してみれば無限のものとなるのである。これを更に具体的に説してみれば僕なら僕が、ほんの瞬間に或る非常に善いことを考えて、その考えたことを妻に話せば妻は僕から聴かれたそのことを幾人かの子供達に聴せ、幾人かの子供達は亦、妻から聴された儘を今度は他の家の子供達に伝言したとしてみよう。斯うなれば僕の、ただほんの瞬間に考えたことが既に幾十人かの頭脳に染み込んでいることとなるのであるが、この問題はなお、これだけでは済まされないのである。

何となれば子供達はずんずん成長するし三児の靈魂は百歳迄と云う譬えの如く成長した暁にも彼等が子供時代に聴された僕のさっきの考えを彼等の子供に話して、これを親から子供へと幾度となく繰り返すこととなれば、仮令僕は死んだとしても前言した瞬間の考えだけは永久に伝えられることとなるのである。これは強ち独り僕のみ例ばかりではない。洋の東西を問わず時の古今を論ぜず幾多の聖人義人文学者達の言動は矢張りなお依然として尊重せられている。で、此の意味から観たならば或は靈魂の不滅と云うことが万更主張されないこともない。

僕は靈魂と肉体とを如何しても切り放して考える訳には行かぬ。例えばコップにサイダーを注ぎ込んでこれはコップだ、これはサイダーだと云う風に全然区別して考えることが出来ないのである。成程器と液体とはその本質に於ては別々のものではあるけれども、その使命を果す上には一致しているのである。即ち器ばかりあつたからとて器に注ぐ液体がなかったならば器の器たる価値がないのと同様に亦、液体ばかりあつたからとて容れる器がなかったならば如何とも致し方がないではなからうか？僕はこの関係を靈魂と肉体とに適用し度い。即ち肉体ばかり存在したからとて靈魂が存在しなかったならば人間としての資格を欠くと同様に亦、靈魂ばかり存在したからとて肉体が存在しなかったならば人間としての資格を欠くのであって肉体と靈魂とはその本質に於てこそ各々別々のものであつても、その価値を發揮する上には一致していると思う。で、一方が欠けて一方のみが存在し得る理由も亦、成立しないものと考えている。それだから肉体が減びても靈魂ばかりは肉体を離れて永久に存在するものであると云う一部の学者の説には耳を傾けることが出来ない。それも肉体が死後腐敗して肉体を構成している各分子が所々方々に分散して各分子に靈魂がそれぞれ付着しているとすれば腐敗した肉体の各分子が分散して或は、草木の栄養分となるとか或は又、動物の内臓内に入るとすれば靈魂は肉体がその形態を存せずとも不滅のものであるとも言えるが、まさか斯う云うことは想像し得られぬことではなからうか？

最近、欧米に於ける一部の学者間には靈魂の正態を写真に撮影し得る、などと言っているが、あれは一種の魔法である。尤も二元の世界に居って突然空中にコップならコップが現われたとしたら、それこそびっくりして妖怪変化としか見えぬそうだが、これを三元の世界に居って眺めては不思議なものにしか見えぬものも四元の世界から眺めては不思議なものでもなんでもないそう

である。それで極楽とか地獄とか云う宗教上の来世も四元五元の世界から観たならば、ほんの吾々の眼前に展開しているのかもしれない。天女が妙楽を奏して舞っているのかもしれない。或は又、青鬼赤鬼が大きな鉄棒を振り翳^{かさ}して悠然と横行しているのかもしれない。けれども、これを肯定し得る確実な実証がない。それで吾々科学研究者の立場から所謂、この地獄極楽の問題を考察する時には殆んど一笑にふす程無価値なものである。

(注：原文縦書き、旧字旧仮名遣いは新字新仮名遣いに変更、送り仮名の変更、ルビの添付、読点の削除などを行った。)



表紙

表現 第四卷 新年 號目次	
卷 頭 言	野 間 空 三 郎
天國と地獄との分化	野 間 空 三 郎
死 後 は 如 何	淺 野 和 三 郎
來世に因む生死の問題	渡 大 救 院 柴 田 一 能
佛敎より見たる天國への岐路	手 島 文 介
死 後 の 靈 魂	神 山 智 道
ダンテの地獄極樂	黒 田 正 利
ゲーテの「ファウスト」に於ける天國と地獄	山 孤 村
京大出陣 片	山 孤 村
科學研究者の立場から見た天國地獄	田 寅 彦
理学博士	田 寅 彦

目次 (前半部)

—— 地獄極楽を見た—— 科學研究者の立場から見た天國地獄 ——

科學研究者の立場から見た天國地獄

寺 田 寅 彦

科學は、五感を通じて見る、一つの學問である。それだから、毎日々々、その目の研究に没頭して居る言へば、宗教上云々云々の、あの思想の範圍で、天女が妙樂を奏して居る觀淨土、佛の山、青鬼赤鬼を舞わしめ居る地獄、大きな鐵棒を手に持ちながら入口を蔽ふ下なる地獄など、いつたい如何うして、承服することが出来やうかと、吾々科學研究者に向つて「あなた方は、宗教上云々云々の、地獄極樂や、承服なされたまはす」と罵倒する人があつたらば、それは承服すまはすに行きません。宗教も外しかたがないけれども、明くも載れても、科學の研究者はかりを取扱つて居る言へば、一種の信條云々云々が、或は、人一倍あるのかもしれない。それは、斯う云ふ結果の爲である。即ち、科學の研究者はかりを取扱つて居る、不思議なことでつくつた言へば、それどころにあるのである。尤も、吾々の立場から云ふに不思議なことは、世間の人々が云ふふところの不思議なことは、その邊を全く異にして居る。それから、佛(釋迦)の不思議なことも、吾々の云ふ不思議なことは、(一)如何に研究しても解釋せられない不思議なこと、しかしながら、この不思議なことは、今日こそ不思議なことが、三つ居る、いづれ後日には解釋することであつて、寧ろ、問題難なれない種々な不思議なことである。(二)不思議なことは、研究すれば研究すれば、(三)自然の力の強大さに驚かされることである。前記した如く、科學にも、人一倍の信條云々云々があるのかもしれない、三つたのは、(一)自然の力の強大

本文冒頭部分

寅彦日記を見ると、大正12年8月23日に「朝表現社の森氏来る」との記載がある。この頃から寄稿を依頼されていたのが9月1日の関東大震災発生によってそれどころではなくなり、年末になって無理やり新年特輯号に間に合わせたような気がする。読んでみると文の続き具合などで推敲不足があるように思うが、多分締切りに追われて見直しが十分できなかったのであろう。寅彦はテーマを自由に選んで随筆を書いていることが多く、このような特集への出作は珍しいと思われる。なお目次には理学博士とあるが本文では省かれている。